

## 地方だより

### 気象庁観測部統計課

昔の統計課を訪れた人は、せみしぐれのようなそろばんの音に驚ろかされたが、今の統計課にくる人は、もの弾けるような電気パンチの騒音にげん顔をやる。そろばんの音から電気パンチの音に変わった変せんの中に、手統計から機械統計への脱皮の歴史が秘められている。

昭和27年に機械統計が採用されて、405型英字式会計機を中心とするIBMのいろいろな機械が動きはじめたとき、気象統計は新しい近代化への一歩を踏み出したということができよう。あれからもう7年の歳月がたったが、その間には機械統計に対するさまざまな批判もあびた。しかしどんなに機械統計に非難を浴びせる人でも、機械統計の能力が手統計時代のそれと比較にならないほど大きなものであることを認めざるをえないであろうし、したがってまた近代統計への脱皮の必然的な過程として現在の統計機構を否定しきすることはできないであろう。

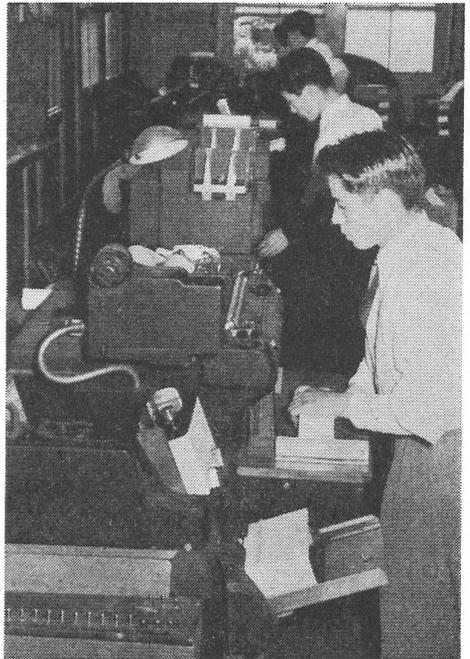
統計課は現在この機械統計を中心として動いている。何を統計すべきであるかを考えて企画し（技術係）この考えを統計機械へかかるように組織だててカード化し（符号係）、機械にかけて計算し（作表係）、これを整理し印刷する（編集係）という一連の作業が統計課の機能である。

機械統計は従前には行うことができなかった一つの新しい分野を開いた。それは調査統計をすることができる能力と余力とである。従前の統計課は、月報や年報のチェックに明けくれた。しかし機械統計はこれを処理して余りある時間と、計算能力とを与えてくれた。観測値の整理印刷ばかりでなく、われわれはさらにその資料を使って、調査統計を行うことができるのである。気象と社会との間のギャップはこの調査統計によって埋められるであろう。

このほか統計課は日本の気候資料のセンターである。統計課の倉庫には、過去80年以上にわたる気象観測の資料が、あるいは原簿となっており、あるいはカードとなっており、高く積まれている。この気候資料はその利用される日をまっている。気象庁の仕事は、天気予報だけが総て

ではない。気候の分野で行われるべき仕事が無限にあるはずである。われわれはこの宝の山ともいうべき資料が、より一般に利用されるように将来は気象資料図書館とでもいうような機構を考えている。

統計課に資料を調べにくる人は多い。気象資料相談所としての統計課の意義は小さいものではない。しかしこれらの人達に、われわれは充分の満足を与えるほどの調査資料を提供することができないのは残念でたまらな



機械統計室

手前にあるのが、「英字式会計機」、その後方は「集団合計複写せん孔機」

い。高度化された計算機能と、整備された気象資料とによって、希望される資料が、銀行の窓口のように、しばらく待ってもらえば、すぐに手渡すことができるような時がくるのは、夢であろうか。

(荒井隆夫)